

# 岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議第3回会議

## 議事概要

日時 令和6年7月4日(木)  
14:00～16:00  
場所 県立図書館2階多目的ホール

### 1 開 会

### 2 議 事

- (1) 第1～2回会議の議論の整理について
- (2) ウェルビーイングの指標について
- (3) 子どもや若者が集い、学び合う場となるための公民館の取組について

### 4 閉 会

#### <議事概要>

##### ○事務局

「資料1」により第1～2回会議の議論の整理と本日の進め方について説明

会長 質問はあるか。本日の進め方についても事務局が提案した形で審議を進めてよろしいか。

全員 了

会長 次に、ウェルビーイングの指標について事務局より説明をお願いしたい。

##### ○事務局

「資料2」によりウェルビーイングの指標（中央教育審議会、OECD、デジタル庁）の紹介

会長 ただいまの説明について、意見等があれば発言いただきたい。

委員 国連の幸福度調査によると日本の幸福度は先進国の中で最下位レベルであるという論調の報道が多い一方で、OECDのウェルビーイング指標においては日本の幸福度は低くない。国連の幸福度調査と事務局が説明したOECDのウェ

ルビーイング指標には、相関関係はあるのか。

事務局

東アジア地域における「幸せ」とは、個だけでなく周囲を含めたものである。中央教育審議会において、日本人のウェルビーイングを国連の指標で正確に測ることは難しいのではないかと議論されたことから、デジタル庁「地域幸福度（Well-Being）指標」が作られている。

会長

欧米ではウェルビーイングの中心は「個人」であるが、日本を含めたアジア圏では、個と社会の両方について考える。

日本独自のウェルビーイングの形を捉えるため、デジタル庁は、個とともに周囲を含めた指標を作成している。周囲も含めたウェルビーイングを考える場合、公民館も必然的に関連してくるということである。

委員

事前に市町村の幸福度・生活満足度を計った上で公民館活動を改善し、数年後に計り直し、取組を評価することはできるのか。

会長

少し期間を置き、定点観測で評価が可能かということだが、いかがか。

事務局

幸福度、生活満足度には多くの因子が関わっており、公民館活動単独によるウェルビーイング向上値を計ることは難しい。

今後の審議の中で、ウェルビーイングに繋がる公民館活動を行う上で意識すべきポイントを示し、チェックシート形式でまとめることができないかと考えている。

委員

資料の中のウェルビーイング指標には、医療福祉、交通や飲食等、教育以外の分野も多く含まれている。

公民館は、「教育」活動によりウェルビーイングを達成するのか、または、地域住民の自治により地域の利便性を向上させ、地域全体を盛り上げることによってウェルビーイングを高めるのか。後者の自治による地域の利便性向上という視点も、ウェルビーイング指標としては重要ではないか。

会長

公民館は、社会教育施設であるため、前者である「教育」を明示すべきだという捉え方もある。地域全体の自治まで指標を広げるか、現状ではそれは難しいという意見もあると思うが、いかがか。

委員

生活環境等、何を基準に良い悪いとするか、個人の主観に左右されるところも大きい。指標の範囲を広げれば、ウェルビーイングを計ること自体が難しくなる印象である。

会長

データで示すと分かりやすく客観的である一方、数字に左右され一喜一憂することもある。

ウェルビーイングを意識した公民館運営を行うことが大切であり、ウェルビーイング指標そのものを公民館活動に当てはめることは難しい。公民館は学習者を大切にし、学んだ成果を地域に還元し活用する活動を今まで行ってきた。それは、個と社会の幸せのためであり、まさにウェルビーイング活動そのものである。

現在「ウェルビーイング」が、教育だけでなく非常に大きい概念として捉えられる中、公民館は、ウェルビーイングを意識した活動となっているかチェックすることは大切である。岡山県としても、活動のチェックができるものを作成できたらと考えるが、事務局はいかがか。

事務局

ウェルビーイングそのものを計るのではなく、ウェルビーイングを意識した活動を行う際の視点をまとめることはできると考えている。

会長

ウェルビーイングを意識した公民館活動かチェックできるものを、岡山県として提案したい。そのために、日本のウェルビーイングのあり方について我々で確認し押さえない。

本日の発表も、そのような視点で聞いていただきたい。

委員

今後、公民館活動の見直しを検討していく必要はあるが、ウェルビーイングとは何かについて、地域の中で話し合われている事例はまだ少ないのではないか。それぞれの地域におけるウェルビーイングについて共有し、活動を再整理していく作業が必要だ。

海外で生まれたウェルビーイングという概念を完璧に捉えることは難しいため、「日本版」ウェルビーイングの実現を考えることはとても大切である。美作、備中、備前版など、地域ごとのウェルビーイングのあり方をとらえるためのベースとして、指標があればよい。

また、今までは館長の力量や企画力により公民館活動が行われてきた側面があるが、地域の方とウェルビーイング指標と照らし合わせながら、今後の活動を検討していくことが必要である。

各公民館が活用しやすく、活動の評価もできる指標を岡山から発信できればよい。

委員

各市町村により社会教育の方針は様々である。

真庭市では外国人を対象に日本語教育を行っているが、例えば、外国人対象のサークル活動や障害者・未就学児対象の活動に重点を置いてみる等、地

域によりウェルビーイング追求のため何に重点を置くかは様々である。

最初から岡山県の方針やポイントの型を作るのではなく、それぞれの市町村の活動内容を出し合い、形にする方が焦点が明確になるのではないか。

会長

ウェルビーイング自体を図るのではなくて、ウェルビーイングを意識した取組になっているかチェックするということである。

各市町村が捉えるウェルビーイングのあり方から、各公民館が取組をチェックし、今後の中長期的計画を作成し、発信できれば良い。

その計画は、地域により特徴があり多様なイメージである。岡山県全体としての考えがあった上で、市町村やそれぞれの地域の独自性を尊重したい。

各公民館が、個と社会という観点で取組を見直し、目標をたてられる指標となるよう委員の皆様と知恵を絞りながら発信したい。

前回に引き続き、1点目は全ての人のウェルビーイングを実現するための施設として公民館の環境や体制について、2点目は全ての人のウェルビーイングを実現するために民間の取組を行う際に意識すべきポイント、この二つの観点で検討を進めたい。

本日は示唆的な事例発表が二つある。前回の会議でNPOや民間企業が公民館を触媒、仲介として取り組んでいる事例を発表いただいていたということになっていた。

公民館単独で事業を継続することは限界もあり、連携先としてNPOや民間企業と積極的に取り組みながらやっている事例として、倉敷市福田公民館の今田館長と水島財団の藤原事務局長に、公民館と団体が連携して取り組んでいる事業について発表いただく。

さらに二つ目の実践発表として、あわくら会館前副館長の白岩委員に、住民と住民を繋げることを目的に行っている村民講座について発表いただきたい。

○倉敷市福田公民館 館長 今田尚登

「資料 地域学校協働活動実践活動例

～倉敷市福田中学校ゴミ減量化作戦～」

○公益財団法人 水島地域環境再生財団 事務局長 藤原 園子

「資料 社会教育・公民館実践とSDGs・協働のまちづくり

～協働の始まり、発展のこの先～」

会長

公民館職員も減少してきており、単独で活動することが難しいことから連携協働しているが、多様な主体と関わる際のポイントや注意点について伺いたい。

公民館長 人間関係が基本であり大切である。得意不得意も人によって異なるため、依頼する場合も無理強いせず、引き受け可能な範囲をお願いしている。

会長 公民館との連携について、財団としての考えはあるか。

事務局長 企画の初期段階で先方に相談をしている。相談の過程でできること、できないことが明確になる。人間関係が構築できていれば相談もしやすい。水島財団は人数、予算とも小規模であるため、相談や協力できる関係性があると、1+1が2ではなく3以上となる。

会長 緩やかな関係性があり、一緒に価値を作ることがポイントである。次に白岩委員に発表いただきたい。

○あわくら会館 白岩前副館長

「資料 あわくら会館・あわくら図書館  
～村民ジェネレーターによる運営～」

会長 何か質問や意見等があるか。

委員 白岩委員のお話は、今田館長の発表内容と繋がる。まずネットワークづくりには、旗印となるものが重要であると理解できた。  
例えば、公害問題の解決や西栗倉村100年の森林構想等、旗印となるものがあり、多くの人に解決すべき問題として認識されることで、協力体制やネットワークが構築される。団体の結束は、人間関係によるものでなくむしろ、その団体にメリットがあるかにより決まる。そのため、団体の連携には、ベネフィットをいかに作るかが重要である。  
一方で個人間の連携は、団体の結束とは異なり、生きがい作りと関係している。例えば、あわくら会館で地域の方がギターを教えることは、自分や自身の事業にメリットがあるからではなく、その方自身の生きがいや喜びとなったからである。  
ギターを教えている方は、誰かの役に立っている等、生きがいを感じたからこそあわくら会館の活動に関わっているのではと思うが、いかがか。

委員 1つは、その方が西栗倉村内で音楽活動をする場が少ないことを憂慮していた中、試しにギターやドラムを教える活動を始めてみたところ、地域の子どもたちの反応が良く、子どもたちのために活動できたことに生きがいを感じられたのだと思う。  
もう1つは彼自身も村主催のイベントにバンドを組んで出場するなど、今

度は自身が活動を楽しみ、地域の子どもたちのためと、自分自身のためが両立したのではないかと思う。

委員

資料の施設ビジョン（未来像）がウェルビーイングになっているのではないかと思う。「あつまる、つながる、やってみる」を循環させることにより活動等に深みが増していく。進める毎に階層が増えていくようなイメージになると良いと思う。また、Wi-Fi対応等自由な使い方を創り出せる「空間的支持」が行われ、あわくら会館・図書館が、村民の方の生活の一部として定着しつつあるような印象を受けた。

現在、住民と公民館の間に隔たりがあることが課題であるが、西栗倉村の活動にヒントがあるのではないかと思う。自由な発想を社会教育法等の枠組の中でうまく組み合わせることができれば、公民館もまだやれることがあると思う。このような空間的支持や発想の柔軟さはどこから着想を得たり、仕入れたのか伺いたい。

委員

村民の方とワークショップを続ける中で、村民の方がこの場所に求めていることを聞き続けてきた結果、使い方は多様であることが分かった。なるべく多くの方のニーズに対応するため、ルールを設けない運用にした結果、現状うまくいっている。

委員

あわくら会館は音響設備や映像設備が整っている。これは、自分の家ではできないがこの場所ならできると住民が思う、ある程度の専門知や専門性がハード面で整っているということであり、それが求心力となっている。今後公共施設の再編整備が進む中で、ハード面で物質的にも機能的にも豊かであることは大切である。

ソフト面においても、専門知を持っていることは重要である。福田公民館は水島財団と繋がることで環境の専門知を間接的に有している。このような関係が可視化されていることが重要であり、ソフトハード両方とも、求心力あるリソースが住民に可視化されていることが重要である。

会長

大変重要な指摘である。白岩委員の発表にあった、「あつまる、つながる、やってみる」というスローガンは、まさに日本的ウェルビーイングである。

特に、「やってみる」は、ウェルビーイングを循環させるために有効である。公民館の標語は、集い、学び、繋がる、である。公民館は社会教育施設であるため「学び」が入っているが、あわくら会館は公民館に準ずる施設であり、生涯学習施設であるため、「学ぶ」でなく、「やってみる」であることがあわくら会館の特徴である。日本型ウェルビーイングを目指す公民館にとって、「やってみる」ことの重要性が非常に示唆的である。

一方で、気をつけるべきことが二点ある。かつて政治学者の松下圭一は著書「社会教育の終焉」において、市民が学び自分たちで活動するようになれば社会教育施設は不要となり、社会教育は終わると言った。

住民が自ら学んでいく状況であれば、貸館があれば良く、専門的職員が不要となる。結果、公民館はコミュニティセンター化する。住民が自ら学び続けることは良いことであるが、職員は不要になるという考えが松下圭一による警鐘である。あわくら会館の今後が気になるところである。

もう一つは、自分たちが学びたい講座となると、趣味やスポーツ等、個人が学習したいものとなる。社会教育施設は学習主体をベースにする一方で「学習すべき課題」も重要である。水島財団のような環境の問題、人権、男女共同参画、防災等、社会的で現代的な地域課題は、「学習すべき課題」である。

公民館は、「学習したい活動」と「学習すべき活動」の両方を行う施設であり、学習すべき内容はニーズは低くとも、継続して行わなければならない。

あわくら会館は、学習したい内容の講座が増えた場合、学習すべき内容の講座の提供をどうするか、公民館ではない生涯学習施設であるため学習すべき内容まで実施する必要がないと捉えることもできる。

あわくら会館の考え方や取組は非常に示唆的である一方で、我々はあわくら会館の取組を通して、岡山県の公民館としてヒントになる点、気をつける点を考えるべきである。本日の事例を受け止めながら、次回以降、皆様と議論していきたい。